

氏 名	田 中 喬 た なか たかし
学位の種類	工 学 博 士
学位記番号	論 工 博 第 983 号
学位授与の日付	昭 和 52 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	建 築 (的) 事 象 の 研 究

論文調査委員 (主査) 教授 増田友也 教授 川上 貢 教授 堀内三郎

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、建築における学問的思索の実践として、解釈学的方法に拠りつつ現象学的に、現存在なる人間の行為、意識に即して、建築とは何ごととであるかを問い答えようとするものであり、さらには、何ごとが建築をあらしめるのかを問い答えようとするものであるが、そのようにして全体的な建築理論の建立、もしくはその復原を意図するものである——本論文は、序章、Ⅰ章、Ⅱ章、終章よりなる。

序章では、Vitruvius と Aristoteles とに拠って、理論と実技とにたずさわるべき上位の技術人としての建築家について、その実証的、帰納的理論の主題としての上位の技術の論旨を注目し、またこれら古典に示唆されて、本論文における思索を、行為としての建築一技術の構造解明へと方向づける。その解明の方法とは、上位の技術についての現象学的な了解からの解釈として、その主題を展開しようとするものである。

Ⅰ章では、技術 *technē* としての建築的事象についての予めの了解を、未だ形而上学的にはあるが主として Aristoteles に就きながら、さしあたり限定する——先づ技術の位階構造について触れ、それによって職能的実践の意味での建築技術 *oikodomikē technē* は、幸福な最高善の生活を求めようとする上位の技術 *architektonikē technē* に必然的に下位づけられ、そこから技術の技術なる上位 *archē* の技術としての建築的技術 *architektonikē technē* を解明する。さらにこれらの古典における建築的技術の諸契機を、いわゆる四因説に準拠してとり出し、それらを全体的に構造化する——物事の真なる第一原因について述べ、そこで始源 *archē* の技術としての建築一技術を指摘するのであるが、その建築一技術が、最高善の生活を目的として追求しつつ、その生活が第一原因に触れうる生活である限り、その目的 *telos* が、循環して、同時にこの技術の根拠 *archē* ともなるということでその全体的構造を解明する。

Ⅱ章では、Ⅰ章のこのような了解を現象学的に解釈する——四因説に拠りつつ、Ⅱ—Ⅰにおいて、技術とは、事実性の制約のうち、目的を投企しつつ対象化する自由な、そのみずからの自由をも作り *poiein*,

為す *drān* ところの行為或は意識であるとし、しかもそれを暗黙の投企としての前 *pro-* 技術からの発生的動態として見届ける。II—Iでは、意識の意識でもあるところの意識構造を手がかりとして、建築—技術の主題とする生活—環境もしくは世界との同調の問題を考察し、この技術人が、他者に同一化しつつ、生活—環境もしくは世界を見つともみずから見られながら、そのように縦横に活躍しうると言わば水平動態において明らかにされ、同時にこの技術が、前—技術からの垂直動態として、それと交徹することが解明される。II—IIIにおいては、準観察と言われる意識の形象的把握の仕方に注目し、建築—技術におけるその対象化とは図式的構成にはかならぬのであるが、その図式は、発生的には、そこに前人称主体を含んだ *hodological* な、しかも実存的意味方向としての図式であるとし、類同代理物としての図面などにおけるその措定化的動態を指摘する。II—IVでは、この技術の初発の実存的意味の *amorphos* な領域において、共感覚的事物はその意味を宿しながらも実存的事物として出現することを考察する。II—Vでは、II—Iの目的契機の捉えなおしとして、終り *telos* なき自由な目的 *telos* の投企として建築—技術の構造的な超出について解明する。実存は、最高の価値へと向って、それ自身の脱自をも投企するが、同時にその投企自体をも超え出るところに実存がはじめて成りうるとして、自由に外に出るところの脱自としての *ecsisistere* をさらにその外に超えところの実践論理の構造を明らかにする。建築—技術は、ここにおいて、暗黙の前—技術から技術への、さらには技術から前—技術への接近として帰るという外 *para-* 技術へと向うところの円環をなすとして、その動的構造を解明する。あらためていわゆる世界内存在について触れ、形而上学的体系をそれ自身の内から超えつつ、建築的事象 *sache* とは、みずから然か成ところの遊戯世界の全体に抱かれ、担われつつ生滅する出来事にかならぬとする。このようにして建築的事象においては、価値と存在とが接触する。

終章においては、II章での限定が、現象学的に解釈された限りで、I章での形而上学的概念に立ち帰って全体を要約している。

論文審査の結果の要旨

本論文は建築—技術の本来の意味を、古典古代の建築理論について、形而上学的な形式原理としてでなく、そこに読みとることの出来る建築的事象に限って、それらを実証的な現象学的立場から解釈しなおそうとするものである。その場合 *Vitruvius* や *Aristoteles* がともにいわゆる建築家 *architekōn* を完全な技術人とし、技術なるものを理を伴った実践であるとし、さらには技術的な事ながらも、いわゆる四因説をとることなどから、両者を根本資料として本研究が展開されている。

得られた成果の主要な点を簡単に要約すれば次の通りである。

1. 創作 *poiēsis* とは当時一般的に自然の模倣と見なされていたが、建築—技術は必ずしもそうではなかった。しかし *Aristoteles* にとって事物の本質にかならぬその形相 *eidos* 原型 *paradeigma* はまた原因 *archē* でもあるところから、この原型を *Gestalt* 的な視覚像と見ることによって、建築—技術もまた模倣的技術と解しうるとする。

2. この形相—原型、もしくは形態 *morphē* が同時に建築—技術における終局—目的 *telos* でもあり、その意味で終局もまた始動 *archē* にかならぬ。

3. 形相は、自然 *physis* がそうであるように、質料 *hylē* と相補的であり、したがって建築—技術における四因は循環的構造をもち、この構造の全体こそが *archē* にほかならぬ。

4. 棟梁もしくは建築家と訳される上位の技術人 *architektōn* の語根の *archē* とはこのような構造的意味をもち、同時に *archē* は始源をも意味し、さらに通常に技術と訳されるもう一つの語根 *technē* は本来は見分けること、知ることである故に、*architektōn* とはまず事からの始源を知る人としての上位の技術人と解釈される。

5. またしばしば建築術と訳される *oikodomikē* は、職能人 *dēmiourgos* による家屋 *oikos* の作事 *praxis* であり、その実践において理論よりも熟練が優先するとして、ともに建築家と訳される *oikodomos* と *architektōn* とを区別する。

6. さらに建築術と訳される *architektonikē* とは上位の技術人 *architektōn* としての上位の技術の実践の術にほかならぬ。

7. 上位の技術としての建築—技術のこのような職能的実践とは、制作すること *poiein* であるが、この場合、その始動因をそれ自身のうちにもつ自然 *physis* の現象に対照して、その始動因をそれ自身のうちにはもたぬ事物を制作することには、前一技術とも呼ばるべき非措定的な準観察が存在論的に先行する。したがって建築—技術は、その実践において、措定的と非措定的、観察的と準観察的との両義的全体構造、もしくは弁証法的循環構造をもつ。

8. 現存在の実存における根本経験とは、世界内存在としての存在了解もしくは世界了解であり、ここではさしあたり生活—環境の非措定的な準観察であり、制作することとしての建築—技術の実践的過程とは、この準観察から措定的観察への相互的な移行の途上にはかならぬ。

9. 制作することは言わば生活—環境にかかわる選択過程でもあるが、古典において、選択するとは既に前もって選択されている事からのことであり、実存論的に言えば、欲することの自由ではあるが獲得することの自由ではない。それは可能性の領域、つまり現象学的存在論に固有の領野に帰属する。したがって制作することとしての生活—環境の措定とは、常に途上のならざるを得ず、しかもその途上 *hodos* とは、みづからのそのそこに住まいつつ、同時にそのそこを図式的に俯瞰しようとするという両義的な場所でもある——一方この措定とは、これらの建築的事象の本来の存在的両義性を喪失させることになる。

10. 現存在の世界投企としての生活—環境の措定—非措定こそが、上位の技術における実践的な建築的事象のすべてであり、それは家屋の作事における実践以前の事からであるが、その根本性格としての両義的な非性が建築的事象の根拠 *archē* にほかならぬ。制作することとしての建築—技術は、このように両義的に可能的な生活—環境の存在的現実化のことである。

——要するに以上の研究は、古典における上位の技術としての建築—技術を現象学的に解釈しなおすことによって、古典的建築—技術論を現代化し、同時に建築論にあらためて古典的体系を与えるものであり、今日の建築—技術とその理論の復原のための先駆的研究であって、学術上実践上高く評価される。よって、本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。